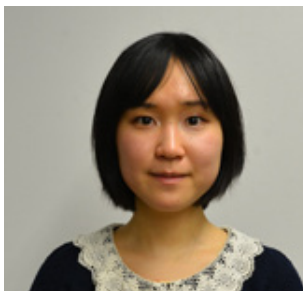


東京大学 教養学部

教養学部は、1・2年次全学部生の前期課程の教育を行うと同時に、独自に専門教育を行う後期課程を擁しています。後期課程では、『学際性』『国際性』『先進性』をキーワードに、文系・理系、あるいは文理を超えた領域横断型の教育を行っています。



■大学生
岡ゆづばさん



■先生
板津木綿子先生



■卒業生
鈴木理子さん

CONTENTS

- プロフィール
- 大学生活について
- 就職活動、仕事について
- 5年後に向けて
- 高校生へのアドバイス

●プロフィール

東京大学教養学部の特色を教えてください。



■先生

東京大学では文系理系に関わらず、全学生が前期課程の2年間で教養学部で過ごします。2年生で後期課程の専攻を選択して希望を出し、2年生の前期までの成績で後期課程の専攻が決まります。入試の時点で、文Ⅰ～Ⅲ、理Ⅰ～Ⅲと分かれて受験していますから、多くの学生は例えば文Ⅰの場合は法学部、文Ⅱなら経済学部、文Ⅲの学生は文学部・教育学部という形で進学します。理系の場合は、理Ⅰが工学部、理Ⅱは理学部・農学部・薬学部・医学部保健学科、理Ⅲは医学部医学科となりますね。もちろん、成績次第で違う学部にもチャレンジすることもできます。入学してから2年間は、様々な講義を受講す

ることができますから、その中で受けた刺激や気づきで、自分が将来進みたい道が見えてくる場合もあるでしょう。そういった時に選択できる幅があるというのは本学の特色といえるでしょう。

教養学部にも後期課程はあります。鈴木さんも岡さんも、後期課程で教養学部を選択していますね。後期課程の選択の際には、学部の中でどの学科のどの分科で学ぶかも選択します。教養学部には、教養学科・学際科学科・統合自然科学科があります。さらにその各学科に様々な分科が設けられています。簡単に説明すると、教養学科では、学問の多様な進展をふまえた学際的な教育・研究を目指し、変貌する世界に立ち向かう国際的な視野をひらく教育・研究を行っています。学際科学科では、個別の学問領域によっては扱えない現代社会の課題に対し、文理を問わず柔軟な思考と適切な方法論を用いて総合的な視点をもって対処できる力を身につけることを目指します。統合自然科学科では数理、物質、生命、認知、身体に関する基本的知識を習得するとともに、複数の分野にまたがる専門的知識を獲得し、科学技術政策や理科系教育の行政職などなど、社会と科学を結ぶ職業人の育成を目指しています。教養学部は、前期課程・後期課程どちらにおいても、文理の境界にこだわることなく、柔軟に学問・研究に取り組める学部ということができるといえるでしょうね。

教養学部の特徴的な授業にはどのようなものがありますか？

■先生

前期課程には、全ての学生が文理の出自にこだわらずに受講できる講義が多く用意されています。後期課程の専攻で学ぶための基礎的な学力土台を形成するのに役立つ講義もたくさんあります。特に2015年度から始まった「初年次ゼミナール」というのは新しい取り組みです。20人程度のグループでゼミに所属し、大学で学ぶための作法、ルール、姿勢などを学ぶのです。論文の書き方や、引用・剽窃などの基本的な考え方も身につけることができます。また、後期課程を見据えて、それに近い講義を選ぶことはもちろんですが、文系出身者が数学関連の授業を受講する、あるいは法学部志望の学生が社会学の授業を取って周辺知識を深めるといった勉強の仕方でもあります。また外国語の授業も非常に充実しています。今年は40言語の授業が開講されています。

一方的に受講するだけでなく、全学自由ゼミという科目があり、自分たちが主体的に運営するゼミの中にはあります。私のゼミは、半期の期間を使って学生たちが主体的に動き、英字新聞を作成するという内容です。

■大学生

私がジャーナリズムに目覚めたのは、この先生のゼミに参加したことが大きいんです。新聞を作る中で、取材や調査をしてそれを誰かに伝える楽しさを知りました。更にそれを英語で発信するというのも刺激的で、英語で行うジャーナリズムに興味を持つようになりました。

■先生

後期では、先ほどお話しした分科に所属し、自分が卒業論文でどのようなテーマに取り組むかを考えていきます。最終的には卒論の指導教官を選び、その分科で卒論を提出します。

■卒業生

私は卒論のテーマを「マイノリティ」に決めました。その内容が、板津先生の研究と近かったため、

指導教官をお願いしました。

■先生

卒業論文は、自分のペースで取り組むことができるのも特徴でしょう。他大学ではゼミに所属して、発表を繰り返しながら卒論を作成するということも多くありますが、教養学部にはあまりゼミがありません。最後まで自分で書き上げる学生もいますし、彼女のように指導教官に相談をしながら書いていく学生もいます。やり方は様々ですね。

先生の研究内容について教えてください。

■先生

研究のテーマは「余暇」です。授業でも取り上げていますが、余暇の歴史を研究しています。余暇が社会の変化と共にどのように変遷していったかを調べ、例えばアメリカの余暇の変化が、日本の余暇・文化にどのような影響を与えたかなどについても考察しています。

また、鈴木さんが話したようにマイノリティについても関心があり、アメリカにおける日本人排斥運動に呼応して日本で起こったハリウッド映画ボイコット運動などについても研究をしています。

一つの側面だけについて調べるのではなく、文化や社会、歴史を、日米で対照させることで分かってくることがたくさんあるんですよ。

●大学生活について

みなさんはどういった理由で東京大学を志望されたのですか？



■卒業生

私は東京都内の中高一貫の進学校に通っていたこともあり、国公立を目指すなら一番上のところ、という傾向があったんです。全国模試などの判定もよかったので「挑戦してみよう」と思ったのが実はきっかけです（苦笑）ただ、入るからには「何がしたいか」ということは考えました。高校生の頃は、法律や経済に興味を持てなかったのも、文学部に進もうと決めていました。漠然と文学がやりたかったという

のもありますね。受験勉強が本格化すると大学のことも調べるようになり、かなりイメージは具体的に描けるようになりました。その時に、やはり教授陣も日本でトップの方たちですし、集まった学生もそうだと感じるようになり「どんな出会いがあり、学びができるのだろう」とわくわくするようになりましたね。

■大学生

私が通う高校も進学校でしたが、私が入学した時に設立されたばかりで、私が1期生なんです。先

輩たちの合格実績のプレッシャーというのはなかったですね。「東大の教養学部ならいろんなエキスパートに会えるのではないか」と思ったのが受験のきっかけですね。同級生には将来なりたいものは違いましたが、東京大学を目指す仲間も多くいて、一緒に勉強に取り組めたのは励みになりました。私は文Ⅱで入学したので、当初は経済学部に進もうと思っていました。その理由は「経済がかっこよさそう」「マーケティングって面白そう」といった単純なもの。でも、前期課程で数学や経済の授業を取って、数式だけで世の中の動きを表現したり読み解くということに違和感を感じ、それが教養学部に進学するきっかけになりました。先ほどもお話したように、板津先生のゼミは特に影響を受けましたね。

では、印象に残った授業はどんなものがありますか？

■大学生

一番進路に強く影響を与えたのは、英字新聞を作る板津先生の講義ですね。大学3年次に留学をするきっかけになったのも、取材して記事を書く楽しさをこの授業で知ったからです。留学先のオーストラリアではジャーナリズムを勉強し、飛び込みで取材に行ったり、現地の放送局でインターンをしたり、ラジオ局でキャスターをしたりと様々な経験を積むことができました。

■先生

彼女の行動力には驚きますね。

私は講義中、日本語を使いません。全て英語で行っています。これは私が独自に行っていることですが、大学でも全て英語で行う講義を増やそうとしています。これからはより国際的に活躍できる人材の育成が求められますから、当然の流れと言えますね。留学生に対しての授業も受け持っているので、私は大学にいる時間の半分くらいを英語で過ごしている感じですね。

■卒業生

印象に残っていたというと、留学ですね。教養学部は外国語も充実していますが、交換留学の制度も他学部と比べると充実しています。それも教養学部を選んだ理由の一つです。

■先生

これは東京大学の学生の特徴かもしれませんが、卒業後の進路まで見据えて入学してくる学生が多い印象です。そのため、必要な講義を受講して、目標にひたすら向かうというスタイルの学生が多いですね。教養学部、なかでも私の学科は留学を希望する生徒が多いので、ある意味では独特です。現在、留学制度を充実させようという取り組みが行われています。多くの学生に留学を経験して欲しいというのは、私の思いでもあります。東京大学は、簡単に入学できる大学ではありません。卒業生には、将来の日本を背負って立つような要職に就く人間も多くいます。そのためにも、日本だけでなく、様々な世界を経験して、考え方や視野の幅を広げて欲しいと思うのです。授業をしていて感じるのは、「学習し、知識を身につける土台がしっかりとできている学生が多い」ということ。教えている側にとって、これはとても楽しいことです。それを活かすためにも、世界に飛び出して欲しいですね。

留学ではどんなことを学ばれたのですか？

■卒業生

私はアメリカの東海岸にある、スワースモア大学という小さな私立大学に留学しました。留学がしたかった理由は、私が帰国子女だったことと、東大とは違う勉強がしたいと思ったからです。とはいえ、留学で取得した単位も東大の単位に振り替えたいと思い、教養学部に近い勉強をしました。そこで、イギリス文学やアメリカ文学、言語学やジェンダー論などの講義を受講していました。

■大学生

私が留学に行こうと思ったのは、より主体的な勉強をしたいと思ったからです。卒業要件を満たすために、東大では半年に18コマ程度の授業を取らないといけません。毎日授業に出て、講義を受けて、試験を受けて、半期はあっという間に終わります。板津先生の英字新聞のゼミのような、自分たちが主体的に動く講義ももちろんありますが、多くの授業は受け身の時間が長いのです。その中で「もっと自分で動いて学びたい」という気持ちが大きくなったのです。



それもあり、留学では就業体験にも重点を置きました。オーストラリアのメルボルン大学に行ったのですが、授業ではメディア論などを受講し、それ以外に地元のラジオ局でインターンシップをさせていただきました。ラジオ番組のワールドニュースを書いたり、朝の情報番組のプロデューサーの仕事をさせてもらったりしました。中でも、企画を任せられ、取材を行う経験をしたことは印象深かったですね。「アジア人が皮膚がんになりやすい」という研究結果を出した教授にインタビューして、レポートを作ったのですが、それを聞いた黒人の同僚が「どうしてアジア人だけで、黒人の日焼けについては取り上げなかったの？」と聞いてきたのです。私はオーストラリアでは「アジア人」というマイノリティであり、少数派の気持ちは多少なりとも理解しているという自負がありました。しかし、黒人の方がそのニュースをどう受け取るか、というところまで考えが至らなかった…。どうしても人は自分の人種やバックグラウンドに考え方が偏ってしまう。公平な報道を実現するためには、個人の努力に加えてニュースルーム内の人材の多様性が必要なのだ、と気づきました。第三者目線の大切さ、報道の難しさと楽しさを知ることができた、本当に貴重な時間でしたね。

卒業研究のテーマは何ですか？

■卒業生

私はアメリカ文学で取り上げられているアジア系アメリカ人について卒業論文を書きました。それもあり、アメリカ文化やマイノリティについて研究されている板津先生を訪ねました。毎週時間を作っていただいて、様々なアドバイスをいただきました。

卒業論文は4年生の夏頃にテーマを固めて、1月半ばに提出します。

私は1年間留学に行っていたこともあり、時間を十分使って取り組むことができましたね。

大学内外でしていた活動はありますか？

■卒業生

私は塾講師や家庭教師、翻訳のアルバイトなどをしました。ネット通販の手伝いや、イベントの運営なども手がけました。

「人生をかけるほど熱中できるものに出会いたい」とずっと思っていて、いろんなことを体験しましたが、まだ見つかってないですねえ。

■大学生

私は高校の1期生ということもあり、チューターとして後輩の子たちに受験や大学のことについて話したりしています。

大学では放送研究会に所属して、アナウンスをやったりラジオ番組を作ったりしていました。

●就職活動、仕事について

就職先をどのように決めましたか？

■卒業生

私は大手銀行で働いています。金融業界が第一志望だったわけではないのです。就職活動の方針は「海外で働ける会社」でした。ただ、やはり企業の人事というのは、人を見るプロですね。あいまいな気持ちで受けた会社はことごとく落ちてしまいました(苦笑)。逆に、海外で活躍したいという思いをしっかりと伝えた会社からは内定をもらうことができました。入社した銀行もグローバルコースで採用していただいています。

まだ今年入社したばかりの新入社員。最初は営業から経験することになりますが、いつかは海外で働ける部署に異動したいと思っています。

■先生

卒業生の進路は、本当に多様ですね。大きく見ると、3割ほどが公務員、3割ほどが一般企業、残りの学生が大学院への進学を選びます。教養学部を見ると、マスコミ系は多い印象です。

どのような仕事に就きたいと思いますか？

■大学生

ジャーナリズムの仕事に就きたいと思っています。そのために再度、オーストラリアのメルボルン大学に留学します。

就職先をどんなメディアにするかは迷っています。新聞社なのかテレビ局なのか、ラジオなのか…ど

の手段で報道がしたいのか決め切れていません。また、一企業の一人の社員として報道に携わるのか、それとも一人の人間として報道がしたいのかということも悩んでいます。いまは様々な報道の手段があります。留学の中で書くこと、聞くこと、また撮ることなどマルチに勉強をして技術を身につけ、自分の将来を見極められたらいいなと思っています。帰国したらすぐに就職活動ですから（笑）。

■卒業生

就活で大切なのは、どれだけ情熱があるかだと思いますよ。その点では岡さんは大丈夫だと思います。がんばってください！

● 5年後に向けて

5年後に皆さんは何をしているでしょうか？

■大学生

私はやはりジャーナリストになりたいですね。いろんな経験も積みたいですと思いますが、専門性も培っていただけるといいなと思います。

■卒業生

海外で仕事がしたいという思いで就職をしたので、それがかなっているといいですね。あるいは、そのためのステップを進めていられれば。例えば海外留学に会社から参加する、とかですね。最初から自分のやりたい仕事をやらせてくれる会社はないですから、まずは目の前にある仕事を一生懸命やって成果を出し認められないと。希望が叶えられる、と信じてがんばりたいと思います。



■先生

先ほどもお話ししましたが、世の中では二人のようにグローバルな視野で考えたり、活躍できる人材が求められています。この大学でそんな人材がたくさん育てられるよう、サポートを続けたいと思います。自分の研究に関していうと、これからよりワーク・ライフ・バランスについて社会が注目していくと思います。日米の文化の差や余暇についての研究をもとに、社会になんらかの提案や提言ができればいいなと思っています。

● 高校生へのアドバイス

大学受験を控えた高校生にアドバイスをお願いします。

■卒業生

計画を立てて勉強をすることを大切にしていました。目標をしっかり立てて、限られた時間の中でそこに向かう計画を立てると、優先順位が見えてきます。

私が高校生に戻れるなら、本を読んでおきますね。小説はたくさん読みましたが、もっと広いジャンルでインプットをしておけばよかったと思います。それがゆくゆくは大学選びや職業選択に役立つ好奇心や知識になると思うんです。

■大学生

得意な教科を伸ばす。そして苦手教科を直視する。それが私が受験勉強で大切にしていたことです。英語は大好きで、得意でした。勉強も楽しいですし、その分だけ点数も伸びます。一方、苦手な数学は逃げていては改善がありません。受験の最後まで点数が低かったんです。でも、数学のどこが苦手か、どこならできるかということは分析し、英語の勉強方法を数学に取り入れたりもしました。それで点数が少しずつ上がりました。

また、海外に行って思ったのは「なんでもできる人って本当にいるんだ」ということ。日本って、勉強なら勉強、スポーツならスポーツなど、何かに秀でたいなら一つに絞るよう迫る風潮がある気がして。でも、一つしかしっちゃいけない理由ってないんですよね。勉強もスポーツも、音楽もできて性格がいいって、すごいこと。そういうのを目指すのも、いいことだと思いますし、なにより楽しいと思いますね。



■先生

私は高校生の時、落ちこぼれでしたね。小さい頃を海外で過ごし、日本に帰ってきて、普通の高校に通っていたんですが、つまらなく感じて授業も面白く感じられませんでした。でも、そこであきらめず、大学に行ったことがよかったと思っています。勉強への関心が生まれましたし、結果、こうして研究の仕事に就くことができています。

高校時代はどうしても人間関係も学校に限られたりします。でも、できるだけアンテナを張って、自分とは違う世代と交流するように努力すれば、また違う世界が開けてきます。それは進学にもプラスになるはずですよ。

●インタビューに答えてくれた方々



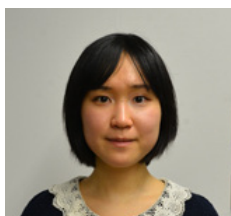
■先生

板津木綿子先生



■卒業生

鈴木理子さん



■大学生

岡ゆづはさん